

図書館だより

埼玉県立図書館

38号



第十回 「本を読む県民のつどい」

昭和六十三年十一月四日、久喜総合文化会館において、第十回「本を読む県民のつどい」が開催されました。当日は、県内各地から三百人の参加者がつどい、生涯学習時代にふさわしく、盛大な行事となりました。主催者のあいさつ、来賓祝辞に続き、別記(三ページ)のとおり十六団体が、埼玉県教育委員会から表彰されました。また、読書推進運動協議会の優良読書グループとして、岩槻市の「しらつる読書会」に表彰状が伝達されました。

そのあと、「母と子の読書会」の若林秋子氏と、「ふじつか文庫」の長島弘子氏から、それぞれの会の運営上の苦勞など、日ごろの活動事例の発表がありました。

記念講演として、作家の宮尾登美子氏が「わたしの描く女性像」という演題で講演されました。講演の概要は、次のページのとおりです。

20
1
2
3
4
5
6
7
8
9
130
1
2
3
4
5

第十回「本を読む県民のつどい」
記念講演 宮尾 登美子氏

「私の描く女性像」(概要)

はじめに

埼玉県には、十三回も講演に来ていて縁の深い県である。講演依頼はたくさんあるが、月に一回だけ引き受けることにしている。行ったことのないところや、読者のいるところに行くことにしている。故郷の高知にはあまり行っていない。

作家になって十五年目だが、最初には呼ばれたのが浦和だった関係で、埼玉には知り合いが多く、今日は来ることを楽しみにしていた。

私の文章作法

十五年前「権」で太宰治賞をもらってから作家として自立した。私は作品の数が少なく、今までに小説は十二作品だけである。随筆は私の生活を中心に十三冊書いている。小説で書きたいことが山のようにあるので、随筆はもうやめて小説だけに専念したい。

私の作品の特色としては、長編が多いこと、漢字が多いことである。私は、文章のモットーとして、話し言葉で三行のものを自分の文章で一

行にし、キュッと引き締まった文章にしたいと思う。例えば、侍が刀を抜く時「電光石火」と書くように。

私は大正生れなので、遊ぶのは嫌いで働くのが好きだ。毎日書齋に閉じこもって小説に打ち込んでいるが、スラスラ書く才能がないので、一日三枚ぐらいしか進まない。カット目をよく見開いて文章を書きたい。それに、おさんどんもやっているので、書くのが遅くなってしまふ。人からはやめた方がよいといわれるけれど、好きなことだから、気分転換にもなっている。この十五年間ずっと仕事

の時間は午後一時から四時までと決めている。

作品のいろいろ

今までの十二の小説は血を流したたせながら書いた感じがある。どれもこれも愛着のある作品である。

私の作品は二つの系列があり、自分自身及び土佐のことを書いたものと、自分自身でも土佐でもないかわりのないものの三種に分けられる。

後者は既に完結したものの三点及び連載中の二点の計五点がある。

『伽羅の香』の主人公は美智子妃殿下のお香の先生がモデルであり、その方は亡くなられている。『天璋院篤姫』も歴史上の人物で上野の寛永寺にお墓がある。『序の舞』と、『松風の家』には遺族の方がいらつしやう。『きのね』も現役の役者の母がモデルなので難しい問題がある。

新聞小説の特徴

新聞小説は作家にとっては大変苛酷な仕事である。毎日、何枚か書かなければならない。休む時は死んだ時である。休んで新聞に穴があいた時、埋めるものが何もない。

他の作家にとっても、新聞小説はつらいものようだ。立原正秋氏は『帰路』を病院のベッドの中で、幽鬼のようになって原稿を書いていたと聞いている。

新聞小説の読者はきびしい。毎日ハガキで評をくれる人もいる。もつとも昔に比べて新聞小説の読者は激減した。普通の人は新聞の見出しくらいしか見ない。新聞小説の読者は、家庭の主婦とかお年寄りが中心で、新聞購読者の一割ぐらいであろう。緊張感が好きなので読者の批評はうれしい。頑張って書く気になるので、

私は新聞小説が好きである。高知から東京へ

女流新人賞は高知でもらったが、文壇の中心はやはり東京である。高知では四国山脈を越えないと偉くなれないというジンクスがあつて、坂本龍馬がその典型だといわれている。土佐は人物王国といわれているが、高知を見捨てて東京へ行く。高知県人は組織の中では偉くなれず、作家や漫画家や政治家など一匹狼が多い。

しかし、高知で新人賞をもらったので、地元の人にはとても喜ばれた。推理小説仕立ての『湿地帯』という作品を高知新聞に連載させていた。今では恥ずかしい作品である。その時の高知新聞の文芸部のデスクが今の夫である。

その後、四十歳で東京に出てきた。そのころは貧乏のどん底でもとも苦労したが、私の人生を振り返ると、一番楽しかった時期でもある。女流新人賞をもらった関係で、婦人公論社に頼み込んで仕事を紹介してもらった。最初は週刊誌や雑誌のライターで、九時ごろ電話がはいり、資料を読み、原稿を書いて、締切りが夜中になる。私は下手くそで編集長から叱られてばかりだったが、それ



「序の舞」について

上村松園のことを書きたいと思ったのは二十歳代後半であった。松園の絵は幼いころから接していた。文化勲章を女性として初めてもらったのがうれしかったこともあり、ずっと関心をもっていた。

彼女の画集の年譜をみたら、結婚していないのに出産という事項が記されていた。明治のころの未婚の母という状況は大変だったのでないかと思ひ、小説的興味を持つたのである。

朝日新聞から依頼があり、松園を書こうと思った。当時は、太宰治賞、女流文学賞、直木賞ももらっていて、作家としてある程度のもになっていた。

この作品の取材のために、一年三か月京都に通った。このころ、体が丈夫ではなかったが情熱のすべてをそそいだ。子息の上村松寛氏に松園のことを詳しく聞いた。また、松園ゆかりのものをすべて見せてもらった。五十六年五月二十三日から連載を始めて、松園の切々たる恋文も発見した。

ある人をモデルに小説を書く場合、その人の輝かしい部分だけでなく、陰の部分まで含めて書かなければならないと思う。その人への興味がずつと心の中に核としてあつて、いろいろな情報が蓄積されて、その核がハツとはじけたようにならないと、私は書けないたちである。その人のことを徹底的に調べ、自分が世界中で一番よく知っている、という自信がなければ書きたくない。それで、美しく、人間的で、生々しい私の松園像を造り上げた。

この作品を連載している当時は、途中から遺族の方から批判があつたりして苦しい目にもあつたが、読者

からとても大きな反響があつた。

『きのね』について

『きのね』も三十歳の時思いついて、長い間考えていたものだ。『小説新潮』の一枚のグラビア写真がきっかけになった。十一代目市川團十郎の妻が写っている写真である。それは意外にも地味な様子であったので、そこに興味をもつたのである。それから取材をし、『きのね』を小説化する時に、関係者から十二代目団十郎の襲名披露が終わつてからにしてくれといわれ、二年待った。団十郎氏からは二十年待ってくれとも言われたが、それでは自分は八十歳代になってしまつて無理だと言った。私のことをもつと若くみていたのかもしれない。団十郎氏とは折り合いがつかなかったが、今年の五月に小説をスタートさせてしまった。ひよつとしたら告訴されるかもしれない。でも、彼女のことは女の生き方として非常に書きたい。自分の感動を書きたいたい。

ものすごいプレッシャーを感じ、体に変調がでるのはいたしかたがないが、私が一番欲しいのは読者の応援である。毎日少ししか書けないけれど、これからもこつこつと書いていきたい。

第十回「本を読む県民のつどい」
被表彰読書グループ及び文庫一覧

- 読書グループ
 - *サークル「よみっこ」 (蕨市)
 - *源氏物語を原文で読む会 (桶川市)
 - *大麻生としび (熊谷市)
 - *わかかな読書会 (深谷市)
 - *花園読書クラブ (花園町)
 - *三ヶ島読書会 (所沢市)
 - *茜会 (飯能市)
 - *読書会たんぼぼ (富士見市)
 - *樋遣川読書会 (加須市)
 - *母と子の読書会 (久喜市)
 - *ひまわり読書会 (幸手市)
- 地域・家庭文庫
 - *みんな文庫 (鳩ヶ谷市)
 - *コスモス文庫 (吹上町)
 - *大畑子ども文庫 (秩父市)
 - *藤久保三区子ども図書館 (三芳町)
 - *ふじつか文庫 (春日部市)
- 活動事例発表者
 - *母と子の読書会 若林秋子氏
 - *ふじつか文庫 長島弘子氏

N君の本棚

君塚 忠男

日に何十点の新刊書が新たに店頭...

夫人の眞氏(流通経済大学教授)は「東京オリンピック女子選手村」...

化に射程をおいてのこの本に、温かい視線を感じると共に、各章のま...

みならず、彼等の国際理解に大いに役立っているようだ。

アム・キャロルの詩集と共に、井伏鱒二の「黒い雨」などが並んでいる。



◎県立図書館の年末・年始の休館日

12月27日(火)〜1月5日(火)

12月〜3月の主な催し物

- 県立浦和図書館
●名作子供映画会
●文化映画会

- 講師 中沢 けい氏(作家)
演題 自作を語る「曇日」について
●県立熊谷図書館
●名作映画鑑賞会

- 日時 1月6日(金) 10時・14時
内容 「森は生きている」
●名作映画会
●郷土を知る映画会

- 名画鑑賞会
●名作映画会
●郷土を知る映画会

※県立図書館特別休館日のお知らせ

Table with columns for library names (浦和, 熊谷, 川越, 久喜) and dates (2月20日, 3月1日, 3月6日, 3月15日).



県内図書館めぐり

三郷市立早稲田図書館

純農村地帯から都市化へと、大きく変ぼうを遂げ、今や十一万都市として発展を続ける三郷市に、昨年九月、早稲田図書館がオープンしました。

三郷市には、すでに市立図書館があり、積極的な活動を続けてきましたが、施設も狭く、収容能力の伸長は望めないことにより、本格的な中央図書館ができるまでの過渡的な能力を備えたものとして都市区画整理され住宅地となった早稲田地区に図書館は建てられました。

早稲田図書館は、二階建て、面積は一六〇〇㎡。一階は、児童図書室になっていて、物語・実用書・絵本に分かれています。また、母と子が一緒に本を選べるように、料理や育児に関する図書のコーナーやタミを敷いたコーナーもあります。さらに、円形の「おはなしのへや」があり、おはなし会や科学あそびの場、また、子供たちの交流の場として使われ喜ばれています。二階は、一般図書室になっていて、ヤングアダルト

コーナー、レファレンスコーナーなどに分かれています。また、CDやカセットテープのあるリスニングコーナーもあり、貸出・試験にと利用者の人気をあつめています。

さらに、十月には、二つの図書館と東和・彦成地区文化センター、北公民館、コミュニティセンターの各図書室をコンピュータで結ぶオンラインも開始しました。

このように、三郷市では、本のあふれる生活が市民に、より身近なものになりつつあります。そこで、職員もおの一層の努力を続けようと決意も新たに一生懸命頑張っています。



所在地 三郷市早稲田五丁目 六番地十五
電話 ○四八九一五八一〇四〇

読書グループの紹介

読書会「サークル道」

秩父市

「サークル道」は、五十四年二月に読書会として発足し十年目を迎え、読んだ本の数は百冊以上、同じ数だけ感想文も残りました。

現在の会員は十三名、本は図書館からお借りしますが時には全員で相談して本を選び、購入して共読書としております。毎月第三金曜日に図書館で例会を開き、当番が司会を担当します。各人各様個性的な意見が出て来て興味深く飽きることがありません。好みの本だけでなくどんな本でも読まなくてはならない読書会だからこそ、多くの作品にもふれ新しい発見もあるのだと思います。

当番はその日の会員の意見をまとめ、自分の所見も入れて感想文を書きますが始めは少し抵抗感がありました。読みやすく易しい本、難解な本、その度に一喜一憂し書くことの難しさを知りました。苦勞や努力を重ねながらの感想文は私達の大切な



(伊藤静江)

財産であり、成長の記録でもありません。

本についての情報交換も盛んで最大限に図書館を利用させていただいています。私達の「サークル道」も図書館あつての「サークル道」といっても感謝しております。

これからも催し物には、なるべく参加して見聞を広め、私達の特長である仲の良さや連帯感の強さ、生涯心おきなく語り合える友を得たことを幸せとして無理せず、気取らず唯一のやすらぎの場として息の長い読書会を今後も続けてゆきたいと願っております。



埼玉の詩と詩人たち —資料展から—

テレビ・ラジオ・新聞・雑誌からあふれ出るおびただしい量の情報、そこではことばが不用意に使い捨てられ、本来のことばの持つ意味や存在価値が希薄になっていることもしばしば見受けられます。

ことばの持つ豊かさ、輝き、生命力が表現される「詩」の美しさを、埼玉では多くの詩人たちが活躍しています。また、全国に同人を持つ詩誌・文芸誌の発行も盛んで、湧き起こる埼玉の詩心がうかがえます。

ここでは、過日浦和図書館で催された「埼玉の詩と詩人たち」資料展の展示資料約九〇〇点の中から、一部を紹介いたします。

記載は書名・著者名・出版社・出版年・所蔵館、特に記載のない場合は浦和図書館所蔵となっています。

詩人の著作

- 遺書 詩集 会田綱雄著 青土社 昭53
- 色のない風 詩集 秋野さち子著 風社 昭51
- 降誕祭前夜 詩集 秋谷豊著 地球社 昭37
- 砂漠のミイラ 詩集 秋谷豊著 地球社 昭62
- タクラマカン越えるあたり 新井正一郎詩集 黄土社 昭58
- 針原 荒川洋治著 思潮社 昭57
- 村の土 光と影 石田利夫著 オリジン出版センター 昭60
- 森の秘儀 石原武詩 岡美行画 文教センター 昭54
- 石原吉郎全集 1・3 花神社 昭54
- 満月をしも 詩集 石原吉郎著 思潮社 昭53
- 狙撃手 今井忠弘詩集 思潮社 昭45
- 榎本了詩集 芸風書院 昭57
- 天の川 詩集 大木実著 国文社 昭32
- 月夜の町 大木実著 黄土社 昭41
- 抒情詩 太田玉著(ほか)著 宮崎八吉吉編 著名著複製全集近代文学館 明治前期 18 日本近代文学館 昭43 民友社明治30年の複製 (熊谷)



- 対岸 詩集 太田浩著 地球社 昭60
- 岡本潤全詩集 秋山清編 本郷出版社 昭53
- 笑う死者 岡本潤著 国文社 昭43
- 不慣れな時代 加賀谷春雄著 潮流出版社 昭42
- おほうつく 詩集 狩野敏也著 風社 昭46
- とべない螢 光畑光男著 地球社 昭53
- 岩魚 詩集 蔵原伸二郎著 詩誌陽炎発行所 昭39
- 風物記 随筆 蔵原伸二郎著 ぐるりや・そさえて 昭15
- 折れる 詩集 榎弘子著 現代詩工房 昭43
- さるやんまだ 佐々木安美詩集 遠人社 昭62
- 定本野良に叫ぶ 渋谷定輔詩集 平凡社 昭39
- 清水正吾詩集 芸風書院 昭57
- 青の童話 詩集 神保光太郎著 高嶺科社 昭28
- 神保光太郎全詩集 審美社 昭40
- 千家元麿全集 上・下巻 弥生書房 昭39
- 鬼灯が…… 詩集 高橋秀一郎著 国文社 昭51
- 途上 詩集 武井清著 地球社 昭56
- 葉のない樹 武村志保拾遺詩集 風社 昭54
- 甲州物語 土橋治重詩集 砂子屋書房 昭62
- 土橋治重詩集 土曜美術社 昭57
- 梁塵 永塚幸司詩集 紫陽社 昭62
- 北緯三十八度線 詩集 中村泰三著 現幻社 昭44
- 中村稔詩集 一九四四―一九八六 青土社 昭63
- 羽虫の飛ぶ風景 中村稔詩集 青土社 昭52
- おまえどこにいるか 詩集 舟越健之輔著 国文社 昭47
- 弾道 詩集 堀口定義著 思潮社 昭52 (熊谷)

いきもの抄 横皓志著 薔薇科社

北入曾 吉野弘著 青土社 昭52

大宮詩集 宮沢章二(大宮詩人会) 一〇号(昭53) 一〇号(昭62)

ある週末 詩集 牧野芳子著 築地書館 昭46

叙景 吉野弘詩集 青土社 昭54

陽炎 飯能 詩誌「陽炎」発行 四八号(昭39) 一六三号(昭44)

町田多加次詩集 芸風書院 昭57

行為の歌 鷺巣繁男著 小沢書店 昭56

風 八潮 風社 五二号(昭49) 一〇八号(昭63)

ヘンゼルとグレーテルの島 詩集 (日本現代詩人叢書) (川越)

霊智の歌 鷺巣繁男著 思潮社 昭53

埼玉詩集 浦和 埼玉詩話会 一集(昭41) 一〇九集(昭61)

水島るり子著 現代企画室 昭58

浦和文芸家協会 昭48

詩・埼玉 (出版地不定) 埼玉詩話会

鬼みち 詩集 宮崎健三著 右文書院 昭48(熊谷)

浦和文芸家協会 昭48

地球詩集 浦和 地球社 一集(昭29) 一三集(昭32)

あんどくの臍 詩集 宮沢章二著 紅天社 昭31

日本未来派詩集 一九五七年版 土橋治重(ほか)編 近藤書店 昭32

むぎばたけ 大宮 宮沢章二 第一号(昭38) 一第一二二号(昭41)

空存 詩集 宮沢章二著 柏樹社 昭46

日本未来派詩集 一九五七年版 土橋治重(ほか)編 近藤書店 昭32

地球詩集 浦和 地球社 一集(昭29) 一三集(昭32)

森の鱗粉 詩集 弓削田紳紗子著 昭46

詩誌

地球詩集 浦和 地球社 一集(昭29) 一三集(昭32)

編集後記

師走を迎え、冬も本番となりませんが、今年例年になく寒さが厳しいようです。さて、本号では県立図書館の文化事業の大きなイベントである「本を読む県民のつどい」にスポットをあて、数多くの文学賞を受賞され現在も女流作家として第一線で活躍中の宮尾登美子氏の記念講演の概要を掲載しました。当日参加できなかった県民の方に参考となれば幸いです。また、君塚忠男氏には歯科医としてお忙しいかたわら、最近の社会事象について所感をまじえた玉稿をいただき紙面を飾ることができました。厚くお礼申し上げます。今年も残り少なくなりましたが、心身ともに健康で新年を迎えたいものです。

おたすねくたさい

問 本の裏に書いてあるアルファベットISBNやCとそれらに続く数字は何を表すのか。
答 日本図書コードと呼ばれるもので、図書を個別化することによって、流通の円滑化、迅速化を図り、増大する出版情報の把握に役立つものと考えられた番号である。

略称 ISBN が制定され、日本にもその導入の勧告がされてきた。これに対応して日本書籍出版協会等による検討がなされ、機械読み取り可能な表示による日本独自の図書コードが決定。八一年から実施されている。日本図書コードはISBNと分類コード、及び定価からできている。

号及びチェック数字から成る。国別記号は国際ISBN機関が定めた数字で、英語圏が0か1、日本が4、などである。出版者記号はその国のISBN機関(日本では日本図書コード管理委員会)が各出版者に割り当て、次の書名記号は各出版者が自分で割り当てられた番号の範囲で与える。このISBNが正しいか判断するための数字がチェック数字である。

コードで、順に販売対象を示す番号と単行本、文庫本のような形態を示す番号、及び本の内容の主題を示す番号からなる。出版情報の一元化に係って、このコードの実施については、言論統制の恐れなどとの反対があり完全実施には至っていない。〈参考文献〉
○ 図書コード利用の手引き 日本図書コード管理委員会
○ 図書館用語辞典 図書館問題研究会編 角川書店

一九六九年に国際標準化機構により国際標準図書番号(International Standard Book Number)

国別記号、出版者記号、書名記

Cに始まる四桁の数字が分類